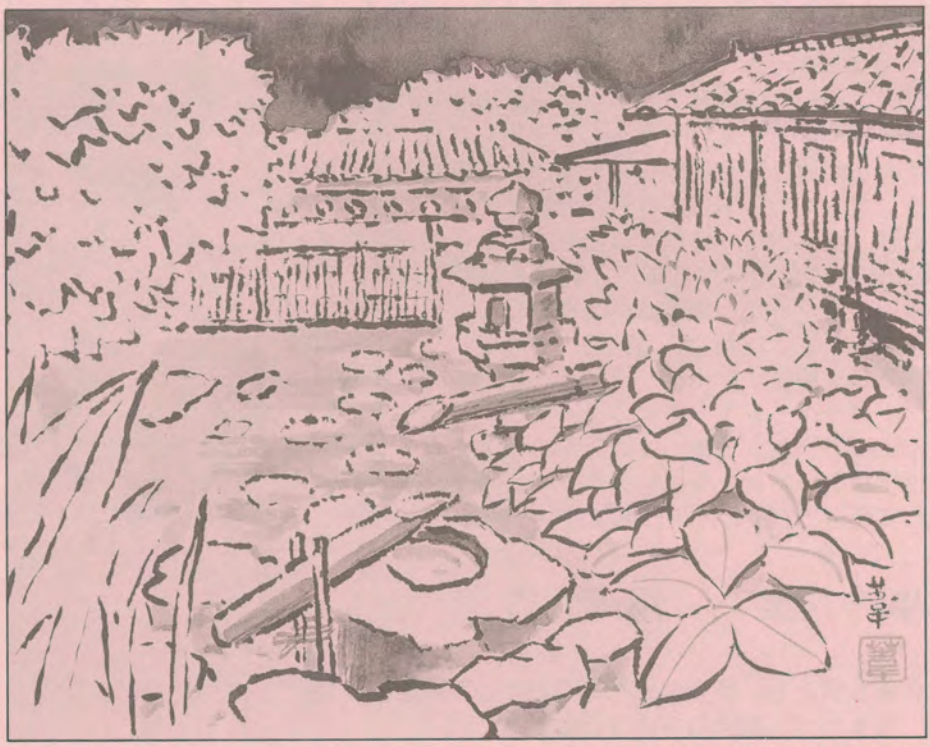
Hamamatsu Museum of Musical Instruments
浜松市楽器博物館だより
No. 3
1996.3.30

楽器のある風景 ― 鹿(しし)おどし



（画：鈴木良雄氏　浜松市三方原町）

春、寒さもゆるみ花の匂いにも誘われ、人々が野に山にと出かけるのを見かけるようになりました。植物図鑑や歳時記がよく売れるのもこの時期だそうです。図鑑を手に山道を散策し、そこにたたずむ野生の花々の名前を探し当てるのも楽しいものです。

季節を感じるのは自然の山野だけではありません。例えば、この季節に多くの観光客が京都の名刹の園をおとずれたりするのも、そこに日本の自然そのものを感じるからではないでしょうか。日本の庭園には、自然をそのままの姿で取り込んでしまいたいという日本人の意識がはっきりとみられます。木々や庭石が見事なまでに自然に配置された庭を前にすると、遠くに見える山々のふもとに立っているように感じられるほどです。

人間の感覚全てを使って自然を捉えたい、と試行したある庭園の製作者は、「鹿(しし)おどし」は聴覚で自然を感じとるための重要な要素であると考えました。鹿おどしは、もともと鹿や猪などから農作物を守るために、田や畑に置いたのが始まりとされています。日本の原風景ともいえる田や畑に響いた鹿おどしの音を、自然の一部として取り込みたいという欲求から日本庭園に取り入れられたのでしょう。

庭を眺めながら静寂な雰囲気を感じているところに、突然の鹿おどしの音、私たちはその余韻のなかに、いろんな音を発見します。水の流れる音、鳥の鳴く声、風の音、木々のざわめき等々。鹿おどしの音が響かなければ、これらの音には気づかないかも知れません。鹿や猪が驚いて逃げるのと同様に、鹿おどしは私たちをはっとさせ、耳を覚醒してくれる役割を担っています。

昔から日本人は自然の音をとても大切に考えてきました。そしてその姿勢は楽器の音にも強く影響しています。論理的な絶対美を求めるヨーロッパのクラシック音楽では、人間にはコントロールできない自然の音、つまり雑音の成分は排除されるべきものと捉えられています。対照的に、日本では雑音は音楽に欠かせないものとして積極的に取り入れられてきました。わざと絃をひずませる三味線のサワリ、音響学的には白色雑音（ホワイトノイズ）とされる能管や尺八の息音などはそのよい例です。私たちは、歌舞伎や能を観覧する際に、この雑音が優しさや厳しさ等をあらわす大事な要素となっていることに気づきます。そしてその感覚は、鹿おどしの余韻の中に聞こえたさまざまな自然の音につながります。

こうしてみると、自然を享受することは、日本の楽器を理解するうえでとても重要なことだということがわかります。日本の伝統音楽を守り続けるうえで一番大切なことは、いつも自然の音に触れられる環境を守っていくことなのかも知れません。

（M．M）

資料収集記（ヒューナバイン・コレクション）―――――――― その2

オー　デ　コロンの発祥地、ドイツのケルン市にお住まいの楽器商ヒューナバイン氏宅は、ライン川のほとりにあります。

市の中央には大聖堂のドーモが聳え立ち、路上には絵が描かれていました。ケルンは、1世紀以降、ローマの植民地だったからでしょうか、街の至るところにその遺跡があり、保存されています。

ヨーロッパにいくと、いつも思うことなのですが、そこに住む人びとにとってローマ・ギリシアは、日本人にとっての京都・奈良のイメージなのでしょう。

ヒューナバイン氏からは、バージナル、チェンバロ、スクエアーピアノ等を購入しました。最初にこれらの鍵盤を弾き、音出しをします。これは、本当に鳴るのかどうか、音程はどうか等を調べるためです。

次に各楽器をどのように分解するか決めます。これは各楽器の組み立て方によって違います。たとえば、ヒューナバイン氏から購入のチェンバロは、大きく脚部・アウター（楽器本体を入れる外箱）・インナー（楽器本体）の三つに分かれます。しかも、脚部は四本脚の枠組み台で、アウターに取り付けてあるわけではありません。また、インナーもアウターに入れてあるだけという状態なのです。つまり各部がバラバラになっており不安定極りない状態です。こうした場合は、脚部付きでの作業は出来ませんので、アウター（楽器本体を入れたまま）と脚部を分離します。その後、アウターから楽器本体を取り出し、養生作業に入ります。この段階で、最終的にどういった形で日本に送るか決めます。全部バラバラの状態で発送するか、アウターにインナーを組み込んで梱包するか等です。幸いにも、ヒューナバイン氏から購入したチェンバロはアウターの状態もよかったため、インナーと一体化して発送できました。日本に着いて梱包を解いた時、破損もなく無事な姿を見て、ヤレヤレです。（O．G）

事　業　報　告

各催し物とも、多くの方々にご参加いただきました。

○セミナー「楽器の中の聖と俗」全5回
　第1回：9月10日㈰　音を出す道具と音楽を奏でる道具
　第2回：10月14日㈯　オリンポスの神々が奏でた楽器
　第3回：11月11日㈯　楽器の性象徴
　第4回：12月9日㈯　呪術としての音
　第5回：1月13日㈯　鳥類と人間の音楽交流史
　講師：西岡信雄（大阪音楽大学教授・当館名誉館長）　会場：アクトシティ研修交流センター
　時間：14時～16時　参加者総数：269名

○講座：「浜松・音の考古学－音具にみる年中行事」
　講師：当館学芸員　小木　香
　日時：2月25日14時～16時　　会場：アクトシティ研修交流センター

○レクチャーコンサート「フランス・バロックの華」
　演奏：木下はるみ（ハープシコード）、
　　西村　喜子（ヴィオラ・ダ・ガンバ）
　解説：佐々木節夫（音楽評論家）
　会場：アクトシティ研修交流センター
　日時：3月2日㈯　14時30分～

○講座：「県内の芸能調査」中間報告会
　講師：当館学芸員　岡　久美子
　会場：アクトシティ研修交流センター
　日時：3月16日㈯　14時～16時

○体験学習「親子でつくろう創作楽器・3」
　講師：当館学芸員、ハーモニカ振興会　神谷　嘉孝
　会場：浜松科学館　　日時：3月24日㈰　13時30分～16時

セミナー第2回より

収蔵資料の紹介 ③

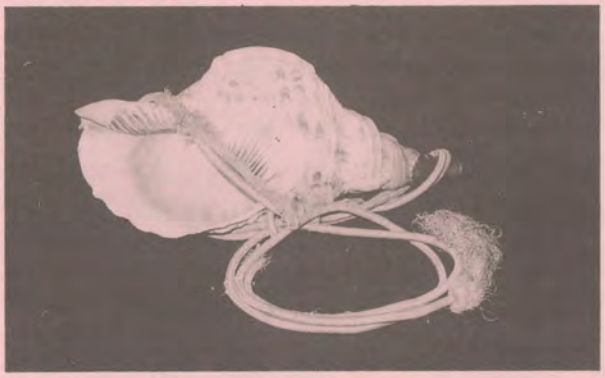
法　螺　貝

法螺貝はアジア・オセアニアを中心に分布する楽器です。ヨーロッパでは動物の角を使った角笛というものがありますが、大型のけものが少なく、農耕民族の日本では、古くから貝が楽器として使われてきました。法螺貝に使われる貝はフジツガイ科の大型巻貝で、日本では紀州以南の薄手でふくらみのある貝が使われます。

法螺貝は唇を吹口で振動させ、その振動を貝の中の空気に伝えて音を発します。つまり音の出る仕組みによって分類すれば、トランペットやホルンなど金管楽器と同じ仲間になります。

法螺貝はいつ発明され、どのように日本に伝来したかはっきりしたことは分かりません。しかし中国の敦煌の壁画やカンボジアのアンコール・ワットのレリーフなどに見られることから、非常に古くから使われていたと考えられます。日本には密教の僧侶たちが唐から持ち込んだともいわれています。

迫力ある音がよく響きわたる法螺貝は、様々な合図に使ったり、宗教的な儀式に用いられることが多い楽器です。日本では戦の合図や、縁日で薬草を売る香具師が人寄せのために使っていました。東南アジア各国では、その重厚な響きから、現在でも毒蛇・毒虫よけ、魔よけの道具として用いられています。オセアニアの島々では、各部族の族長が人の誕生や死、天候の変化などを知らせるために使います。また法螺貝は唇を使って音を鳴らすだけではなく、声を吹き込んで様々な音を出したり、貝の中に手を入れて音の高さを変化させる場合もあります。



奈良の東大寺二月堂で毎年３月に行われる修二会（しゅにえ）の行事の一つ「御水取り」では、練行衆全員が各儀式の間に法螺貝を吹き鳴らします。大きさは大小様々ですが、低音用で特に大きな大法螺の中には「尾切（おぎり）」「小鷹（こたか）」などの名器があり、足利義尚がその音を絶賛したとして有名です。薬師寺では太鼓や鐘とともに用いられ、さながらヨーロッパの金管アンサンブルのようです。　(T.S)

展示コーナーの紹介 ③

アコーディオンのなかま

第１展示室の奥の階段を下りて第２展示室へ行くと、正面のステージ上に、「フリー・リード」と呼ばれるしくみによって音を出す楽器がならべられています。ここでは、学校の教材などとして使われているアコーディオンやハーモニカのなかまの楽器をみることができます。

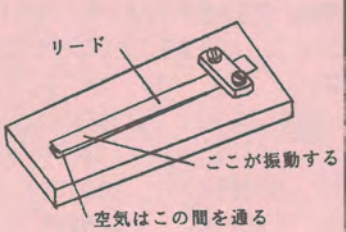
フリー・リードは、薄い金属片などでできた細長いリードの一方を、あなの上にネジなどで固定し、リードとあなの間を空気が通るときに固定していないところが振動して音が出るしくみです（下図参照）。リードの長さによって音の高さが決まるため、リードと同じ数しか音が出ません。ヨーロッパにおけるフリー・リードの楽器の歴史は、中国の笙が伝わったことから始まるといわれています。パイプオルガンに部分的に用いられるようになったフリー・リードは、やがて、様々な楽器の考案をもたらしました。一例を挙げてみます。

ハーモニカ	1821年 C.F.L. ブッシュマン考案	（展示品は C.F. デフェル / シュタインフェルザー製）
アコーディオン	1822年 C.F.L. ブッシュマン考案	（展示品は「フルーティナ」、M. ビュソン製）
シンフォニウム	1829年 C. ホイートストーン特許	（展示品あり）
コンサーティナ	1844年 C. ホイートストーン特許	（展示品あり）
ハーモニウム	1840年 F. デュバン特許	（展示品あり）

このコーナーに展示されている楽器は、口で吹いたり吸ったりするものとふいごで空気を送るものとの２つに分けることができます。前者はハーモニカとシンフォニウム、それ以外は後者です。また、後者をボタン式と鍵盤式に分けることもできます。

大きさや形は様々ですが、これらは皆、親せき同志の楽器といえるでしょう。

(I.N)



楽器博物館事業予定一覧表

事　業　名	予　定　期　間	内　　容
特別展 敦煌壁画復元楽器展	9月28日(土)～10月27日(日)	中国敦煌研究院により復元製作された敦煌莫高窟壁画の古代楽器35種60点他を展示し、日本にも関係の深い古代の楽器について紹介する。また、この展示にあわせ、講演会を行う。
特別展 ペルシアの音楽と風土	平成9年3月25日(火)～5月11日(日)	現在のイランの楽器約50点他を展示し、古代シルクロードを舞台とした楽器の東西交流史と現状について紹介する。また、この展示にあわせ、講演会を行う。
企画展 純正調オルガンと 田中正平	5月21日(火)～5月31日(金)	世界に4台現存する純正調オルガンのひとつを展示し、その発明者である田中正平博士の業績をあわせて紹介する。なお、この展示は、同タイトルのレクチャーコンサートと連動する。
小展示 楽器の科学 金管楽器とｻｸｿﾌｫｰﾝ 新着資料紹介	4月23日(火)～5月31日(金) 7月30日(火)～9月1日(日) 平成9年1月28日(火)～3月2日(日)	特定の小テーマによる展示を行う。 音のでる仕組みと音の正体について紹介する。 金管楽器の歴史とA．サックスの功績について紹介する。 平成8年度に新しく収集された楽器を紹介する。
講　座※ 学校教育・社会教育のための博物館利用法 （楽器博物館への誘い）	8月1日(木)・2日(金)	青少年の学習のために博物館をどのように利用すればよいかを考える。小中学校教員や青少年団体指導者、及び博物館活動に関心のある学生及び一般成人を対象とする。
講　座※ 日本の洋楽文化史－ 初期国産洋楽器	9月7日(土)	浜松を中心とした国産洋楽器製造と普及の歴史を考える。 なお、この講座は見学会と連動する。
連続講座※ 楽器の東西交流史	10月26日(土)、11月23日(土) 12月7日(土)	シルクロードに沿った古代からの楽器の伝播と文化交流を考える。
セミナー※ 楽器の聖と俗	5月18日(土)、6月8日(土) 7月13日(土)	楽器の持つ聖（神）と俗（人）の2面について考える。
報告会※	平成9年1月25日(土) 平成9年2月22日(土)	県内及び市内の民俗芸能等を、楽器をテーマに調査研究し、中間報告をする。
見学会※ 楽器製作現場見学会	9月21日(土)	市内及び近郊の楽器工場・工房を見学し、楽器ができるまでの工程を知る。
体験学習※ 楽器の科学	5月11日(土)	音の正体と発生の仕組みを実験しながら考える。
体験学習※ 楽器を作ろう	8月1日(木)～8月11日(日) 8月20日(火)～8月30日(金)	館内において、20分間ほどで簡単な楽器を作り、楽器に親しむ。
ミュージアムサロン	毎月1回　日曜日	楽器にまつわる様々な事柄を、演奏等交えながら楽器博物館学芸員が紹介する。
レクチャーコンサート 純正調オルガンと 中田正平	5月19日(日)	純正調オルガンとその発明者である田中正平博士について、パネル形式による解説を交えながら演奏する。
レクチャーコンサート サクソフォーンの世界	8月9日(金)	サクソフォーンの発明者アドルフ・サックスの功績と彼自身の制作したサクソフォーンを紹介する。
レクチャーコンサート ガムランとジュゴッグ	10月5日(土)	インドネシアの楽器であるガムランとジュゴッグについて、解説を交えながら演奏する。
レクチャーコンサート ルーマニア民族 アンサンブル	12月1日(日)	ルーマニアの音楽について、解説を交えながら演奏する。 （ルーマニア人出演者）
レクチャーコンサート ペルシアの音楽	平成9年3月	ペルシアの音楽について、解説を交えながら演奏する。 （イラン人出演者）

・※は申込制です。詳細は楽器博物館へお問い合せ下さい。
・特別展、レクチャーコンサートは有料です。
・日時・内容等変更になる場合がありますので博物館にご確認下さい。

利　用　案　内

開館時間：火曜日～日曜日　午前9：30～午後5：00
休 館 日：月曜日（祝日にあたる時は開館）、祝日の翌日、12月29日～1月3日
－祝日前後の開館日については、変更することがございますので当館にご確認下さい。－

観 覧 料：	個人	団体(20人以上)	団体(80人以上)
大人（大学生以上）	400円	320円	240円
中人（高　校　生）	200円	160円	120円
小人（小・中学生）	100円	80円	60円

※館内には、貴重品以外のお荷物は持ち込みできません。

浜松市楽器博物館だより
1996年3月30日発行
No.3
編集　浜松市楽器博物館
〒430　静岡県浜松市板屋町108－1
TEL　053－451－1128
FAX　053－451－1129
印刷　株式会社　シバプリント